

届いています 感謝の声

本会が助成した社会福祉施設から

地域に根ざした支えとして ねっこの郷福祉会(京都市伏見区)

病や障害のある方の社会復帰に向けた訓練を行う通所授産施設「社会復帰センター淀作業所」と、相談支援や社会交流の場である地域生活支援センター「ふれあいサロンねっこの郷」の精神障害者福祉施設を運営している社会福祉法人ねっこの郷福祉会は、昭和57年に伏見区・中書島で社会復帰センターを設立したのが始まり。平成7年に現在の淀に移り、精神障害者を主体とした京都市第1号の地域生活センター・授産施設として、精神に障害のある方々へのサポートを続けています。

「当会の理念は、当事者主体を基本として、当事者が人間らしく生活できること。“ねっこの郷”には、利用者が自分らしく生きることができるよう地域に根ざしていきたいという思いが込められているんです」と話すのは主任の木村奈央さん。一般就労をめざす社会復帰センター淀作業所は3年間の通所が基本で、開始当初は午前中の2時間みの作業を行い、その後は週5日、9時～16時と時間を延ばし、集中力と持続力を養います。主な内容は地域の方から提供していただいた衣料などをリサイクル品へ補修・手直しするこ



リサイクル品を販売しているふれあいSHOPはあーと

と。着物地をほどこき、新たなベストやドレス、小物といった再生品を作っています。できあがった製品は入所者自らが値を付け、隣接している「ふれあいSHOP はあーと」や淀駅前前のバザーで販売しています。施設の職員によると「こんなに良く出来ているのに100円!?(笑)」ということもあるそうで、地域の皆さんからの評判も上々だとか。また、この活動には就労のためだけでなく一人でも生活ができるための訓練も兼ねているそうです。一方、ふれあいサロンねっこの郷では相談・交流が主体。こころの病や障害のために、社会生活がうまくいかない方や家にこもりがちな人の活動・相談場所です。昼食調理やレクリエーション、創作活動を行いながら、目標に向かう方をサポートしており、24時間の電話相談や社会復帰を果たしたけれど、うまくいわずに悩んでいる人へのアフターフォローなど、きめ細か

い対応を心がけているそうです。

ねっこの郷福祉会は、施設の運営を続けていくには、地域の方の理解は不可欠と考えており、交流のツールの一つとして毎月の機関紙「よどセンターつうしん」を発行。施設の協力会員に入っただいている地域の皆さんや他の団体に配布しています。

地域とのコミュニケーションツールの一助に

ねっこの郷福祉会は07年度に本会の助成でデジタル印刷機を購入しました。「新しいデジタル印刷機は、パソコンからのデータ処理が早く、以前に使用していたものよりも作業時間が短縮されたので、編集をしている職員はとても助かっています。また、鮮明に印刷ができるので、読者の皆さんから『見やすくなったね』と好評なんです。馬主協会からは、断裁機や製本機も助成していただいたこともありまして、今回の印刷機とともに幅広い対応が可能になり感謝しています」と木村さんは話します。機関紙にはねっこの郷主催のイベント情報や活動内容、地域の皆さんとの交流についての話などが掲載されており、楽しんでいる方も多いのだとか。開所当時は精神障害者という言葉が先行して、施設周辺の方が一歩引いてしまう部分がありましたが、この機関紙や週2回の淀城跡公園の清掃活動、毎年開催の“ねっこの郷まつり”などの施設主催イベントを通じて施設への理解が得られたという職員の声もあり、地域への情報発信ツールとして重要な役割を果たしていることがうかがえます。



昼食調理に取り組む利用者



鮮明な紙面を実現したデジタル印刷機

緑豊かな田園風景に建つ、福祉のさと 四天王寺太子学園(大阪府南河内郡太子町)

ぐるりと続く金剛生駒の山なみにいだかれた大阪府南河内郡太子町。聖徳太子ゆかりの地にある「四天王寺太子学園」を訪ねました。

太子町は奈良県との県境にあたり、推古天皇陵や小野妹子の墓などの史跡が点在。近つ飛鳥博物館など悠久の歴史にまつわる施設もあり、緑豊かな田園風景が広がっています。

そんな大らかな風景の中に建つ同園は、入院治療を必要としない、心身に障害がある児童の入所施設です。宮城まり子さん主宰の「ねむの木学園」をはじめ全国に7つ設立されている「肢体不自由児療護施設」のひとつです。子どもたちが将来の社会生活に順応できることを目標に、日常生活や学校教育、また地域において暮らしを営むための支援を行っています。利用者は48人。34人の常勤職員の方が支えています。

設立は昭和47年。大阪府により設立され、四天王寺福祉事業団が運営し、平成16年には大阪府から同事業団に移管されました。この間、何度か改修されたものの、設備の多くは老朽化したままでした。

葉山清施設長も「浴室はタイルもボロボロ。天井も高いので冬は寒く、夏は蒸気がこもって暑い。介助する人も入浴する人も大変でした」と振り返ります。

当時の浴室周辺は、脱衣場と湯舟までの距離が長く、自分たちの力で湯舟まで行けなかったり、また体重が大人なみの子どもたちも少なくなく、「すべりやすいし、私たちも抱えて運ぶのに懸命でした。寒い季節など、風邪をひかせては...と、気が気でなかった」と支援員の森和久さんも話します。

「すごい、ホテルみたーい」と喜びの笑顔

そこで17年から「よりよい入浴介助を行うために」、施設改修を視野に入れて、職員7人でプロジェクトチームを作り、福祉施設を何度も視察しました。19年4月に大阪府の推薦を受けて、本会に要望書を提出されました。

審査検討の結果、本会は、同園の「浴室・脱衣室改修工事」に平成19年度助成金交付を決定しました。決定通



動線を考えて設置された浴室

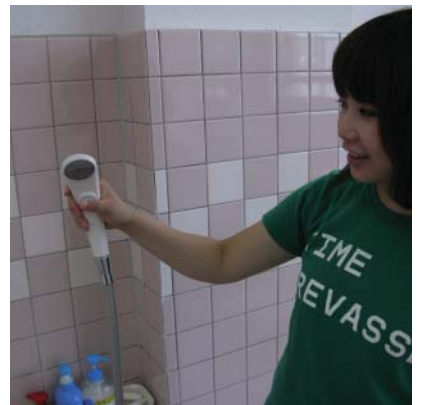
知は8月に届き、12月から工事が実施されました。

職員さんの意見を取り入れ、改修された結果

内装は薄ピンク色の優しい色を基調とし、自然光がたっぷり入る、明るい雰囲気。また脱衣場から湯舟までの距離が短くなりました。従来、入口から見て「深く 浅く」と続いていた湯舟の深さを、「浅く 深く」とスムーズに移動できるよう改善。湯舟の一部が死角になるほど大きかった給湯口を小さく。また脱衣場に子どもたちが腰掛ける介護台を設置しました。

一緒にお話をうかがった支援員の小門優希子さんも「初めて子どもたちをこの浴場に入れたとき、「うわー、すごい」「ホテルみたーい」と喜びの声が上りました。嬉しそうに入るのを見ると、こちらも嬉しいですね」と語ってくれました。

今日も思い思いの笑顔が満ちる同園の浴室。多くの方の思いやりの心は、こうして伝わっています。



使いやすいようにブッシュ式シャワーを導入